

2024 年度支部研究補助費活動報告

建築デザイン教育部会 部会長 櫻井一弥

2011年3月の東日本大震災よりまもなく14年を経過するところであるが、我が国ではその後多くの自然災害が頻発し、様々な課題が浮き彫りとなっている。2024年初頭にも能登半島での大規模な地震と津波が発生し、現在も被災者は避難所での苦しい生活を強いられるなど、本格的な復興には未だ長い道のりが想定されている。

本研究では、これまで部会委員が多く関わってきた東日本大震災復興シンポジウム「みやぎボイス」で蓄積された知見を生かし、能登半島地震をはじめとする様々な自然災害からの復興における諸フェイズにおいて、「みやぎボイス」で得られたネットワークやノウハウをどのように活かせるか、関連諸団体と一緒に考察することを目的とした。

「みやぎボイス」は、年に1回、東日本大震災からの復興に関わる様々な立場の方々が一堂に会して議論することで、震災復興の現在を確認し、地域の課題を共有する場として機能してきた。震災後の宮城県・東北地方における建築やまちづくりに関して、単なる復旧・復興にとどまらない、新たな地域づくりのための意識の共有や、異なる専門家同士の連携が大きな課題になっている。今回は、2024年1月に発生した能登半島地震に関する復旧・復興について、東日本大震災時の経験を踏まえた議論を進めたいと考え、「のとボイス」を2025年2月2日（日）に開催した。みやぎボイスのプラットフォームを活かし、能登半島地震にその記録と検証をどのように活かせるのか、また今後予想される様々な出来事にどのように対応していけば良いのかなどについて、現地で活動している方などと議論し、今後の復興まちづくりと人づくりに活かして行く場にすることを期待した。

例年みやぎボイスでは「ラウンドテーブル」という議論形式により、立場を超えたフラットな関係性のもと、登壇者も聴衆も一体となった課題の共有と気づきを与える場として実施してきた。今回金沢での開催にあたり、復興状況などについて現地の方々と議論を重ねた結果、みやぎボイスで継続的に実施してきた3テーブル同時の議論開始ではなく、1テーブル3ラウンドで連続的に議論する形式を採用した。また、リモート併用とし、一般参加者が参画しやすい開催形態を模索した。各ラウンドの議論テーマは以下の通りである。

ラウンド1 「なりわい・文化・コミュニティ…大切にすべき能登の価値」

ラウンド2 「いかに残し、いかに活用するか？」

ラウンド3 「被災地でこれから課題となるもの」

これまでみやぎボイスに登壇いただいた方や運営に携わってきた者も多く参加し、能登の現状と今後の課題について多彩な議論を展開することができたとともに、長年にわたるみやぎボイスでの経験を踏まえ、復興に際して今後展開が予想される事象や乗り越えるべき障壁などを議論し、多様な意見交換と示唆に富む知見の共有ができた。

当日は複数の新聞社の取材と、NHKによる報道があった。研究補助費を有効に活用し、時宜に合った企画が開催できたと考えている。